

家族のために、 もう決して逃げ出さない。

安城教会 有迫宜徳さん

有迫さんは、ギャンブル依存症だった。仕事は長続きせず、必然的に生活は困窮。「家族のために何とかなくては」と思うが、現実を直視できずにいた。だが、有迫さんのまわりには、支えてくれる仲間がいた。就職の世話をしてくれる人、ときに一喝して社会人としての心得を伝えてくれる人…。そうした人たちとの付き合いのなかで、地元の祭りで披露する万灯行進の責任者に選ばれたことが転機となる。参加者を呼びかけたり、対立する意見をまとめたり、以前だったら逃げ出してしまいそうな局面を乗り越え、立派にやり遂げたのだ。そして、言葉にできないほどの充実感を得ると同時に「もう決して逃げ出さない」と生き方を変える固い決意をした。これからは真面目に働き、休日には家族で団欒する。そういう夫であり、父親になりたいと強く願っている。



敬う心と恥じる心

「八正道」の「正行」とは、「身の行ない」における正しいあり方のことです。「生き物を殺さない」「盗みをはたらかない」「邪な男女関係を持たない」ことが正しい身の行ない——確かに、それは正しさに違いなく、殺生や盗みは法律にふれる対象でもあります。それでも、「してはならない」という禁止事項が「正しい行ない」といわれると、心理的に「正行」のハードルが高く感じられます。そうであれば、「戒律を守らなければならぬ」と意識する以前に、いつでも自然に、「苦悩しないで済むような行ない（正行）をせずにはいられない」ようになればいいのです。そこで、キーワードとなるのは、敬う心と恥じる心です。

仏教徒は仏さまを敬い、「仏さまのようになりたい」という願いをもつて精進しています。ただ、そのなかでは、しばしば至らない自分に気づかされます。しかし、安岡正篤氏は「敬して己を恥じる心が生まれたら、おのずから至らない自分を危ぶみ、神仏の願いにそつた行動を心がけるようになる」と述べられています。これは「仏とその教えに帰依すれば、正行が当たり前の人間になれる」と受けとめることができます。

また、敬う心と恥じる心は、進歩・向上を求める人間の本能に通じるともいわれます。すると、つい我を忘れて道を踏みはずしそうになる私たちを、本来の人間らしい生き方に立ち戻らせるのも、この二つの心といえましょう。